

在華宣教師の洋学資料に見える四字語：蘭学資料の四字漢語との対照を兼ねて

著者	朱 京偉
雑誌名	国立国語研究所論集
号	6
ページ	245-271
発行年	2013-11
URL	http://doi.org/10.15084/00000519

在華宣教師の洋学資料に見える四字語

——蘭学資料の四字漢語との対照を兼ねて——

朱 京偉

北京外国語大学／国立国語研究所 理論・構造研究系 客員教授 [-2010.10]

要旨

本稿に先立って、筆者は、朱京偉 (2011a, 2011b) で蘭学資料の三字漢語を考察し、在華宣教師資料の三字語との比較対照を行なった。また、朱京偉 (2011c) で蘭学資料の四字漢語を取り上げ、できる限りその全体像を描いてみた。これらに続く作業としては、在華宣教師資料の四字語を検討し、蘭学資料の四字漢語との比較を行なうことである¹。このような日中対照を通して、19世紀当時の、日本語の四字漢語と中国語の四字語のそれぞれの特徴を明らかにすることによってはじめて、両者間の影響関係を正しくとらえることができると考える。

結論からいうと、在華宣教師資料の四字語は、基本的な構成パターンで蘭学資料の四字漢語と大差がないように見えるものの、その中身をくわしく検討すると、語数が全体的に少ない上、語基と語基の結合関係の分布も異なる。こうした語構成上の相違は、多かれ少なかれ日中両言語の四字語の造語力に影響を与えたと思われる。

キーワード：四字漢語、在華宣教師資料、漢語の語構成、漢語の語基

1. はじめに

19世紀前半の蘭学資料の用語を調べていると、二字漢語・三字漢語とともに、四字漢語も数多く見られることに気付いた。とりわけ、2+2型四字漢語は、四字漢語全体の中で9割以上を占めており、しかも「呼吸+困難、過剰+運動、冷血+動物、栄養+過度」のように、それまでの日本語に見当たらない多くの新語が含まれている。つまり、明治期で造語の全盛期を迎えた2+2型四字漢語は、蘭学の著訳書をベースに形成された造語パターンといっても過言ではない。

これに対して、近代以前の中国語では、「吳越同舟、四面楚歌」のような四字熟語が主流で、2+2型の四字語はあまりないことから、現代中国語の2+2型四字語は、伝統的な文言文に由来したとは考えにくく、むしろ、その前身は白話文に近い文体で綴られた19世紀後半の在華宣教師の漢訳洋学書に遡れるのではないかと推測される。この推論を裏付けるためには宣教師資料における四字語の実態を詳しく調査することが必要である。また、調査の結果に基づいて、蘭学資料の四字漢語と宣教師資料の四字語の間にどのような共通点と相違点が見られるのか、両者の間には借用関係がないのか、といった問題を解明することをめざしたい。

¹ 中国語の語彙には、漢語・和語・外来語といった日本語の語種に相当するものが存在しないため、宣教師資料では「四字漢語」ではなく、「四字語」と呼んで蘭学資料の場合と区別した。なお、蘭学資料の「三字漢語」に対して、宣教師資料では「三字語」と名付けたのも同じ理由による。

2. 四字語の抽出語の概況

本稿に先立って、筆者が在華宣教師の洋学資料における三字語をとりあげた際に、研究資料については、刊行年、著訳者およびジャンルに配慮し、13種の資料を調査の対象として選定した²。四字語の抽出にあたり、三字語の時と同様な資料範囲で抽出作業を行なった。また、三字語に比べ、中国漢文の文脈で四字語を認定するには、漢字4字で1語なのか文構造の句なのかに疑念が生じる場合もあるが、厳格な定義に基づいての抽出というよりも、筆者が蘭学資料から四字漢語を抽出した際の方針に照らして、「漢字4字でひとまとまりの意味を表す文字列を最大限に抽出」する方法で作業を進めた。

抽出した四字語の整理についても、蘭学資料の四字漢語との対照を念頭に、それと同様に、つまり、「各資料の成立年次に従い、同一語で初出が一番早い用例だけを残して、その他の重複語を除く」という方法で整理し語の異なりを求めた³。その結果、各資料の抽出語の語数は表1のようになった。

表1 調査の対象資料と四字語の抽出語（異なり語数）

資料名	分野	総字数	抽出語	版本
1853《遐邇貫珍》麦都思編	雑誌	43.6万	54	香港英華書院印刷
1854《博物新編》合信著	自然科学	4.9万	22	明治5年(1872)江戸老皂館
1857《六合叢談》偉烈亜力編	雑誌	19.5万	33	上海墨海書館印
1858《内科新説》合信著	医学	5.4万	16	安政庚申(1860)天香堂蔵版
1864《万国公法》丁韞良訳	国際法	8.1万	49	慶応元年(1865)京都崇実館
1868《格物入門》丁韞良著	自然科学	7.9万	34	明治2年(1869)明親館蔵版
1876《格物探原》韋廉臣著	自然科学	10.6万	24	光緒2年(1876)活字板印
1887《電学須知》傅蘭雅著	電学	1.3万	26	未詳、実藤文庫所蔵
1890《西国天学源流》王韜訳	天文学	1.9万	10	淞隠廬活字版
1890《重学浅説》王韜訳	力学	1.2万	12	光緒庚寅(1890)淞北逸民校刊
1894《全体須知》傅蘭雅著	医学	1.5万	36	未詳、実藤文庫所蔵
1896《格致質学啓蒙》艾約瑟著	物理学	5.5万	18	上海著易堂書局発兌
1896《身理啓蒙》艾約瑟著	生理学	6.1万	21	上海著易堂書局発兌
		117.5万	355	

先に行なった7種の蘭学資料についての調査では、約101.8万字の本文から計561語の四字漢語を抽出することができた。これに対して、13種の宣教師資料では、約117.5万字の本文から計355語の四字語を抽出したので、宣教師資料における四字語の使用率が蘭学資料に比べて相当低くなっていることがわかる。その理由として、用語の抽出は専門語を中心に行なったものであるが、宣教師資料では、二字語・三字語・四字語を含め、専門語そのものが全体的に少ない傾向にあるため、専門語でかつ四字語という条件を満たした語が自ずと限られているということがあげ

² 朱京偉(2011b)の第1節を参照。

³ 朱京偉(2011c)の第2節を参照。

られよう。また、四字語の構成パターンを調べてみると、次表のようにになっている⁴。

表2 宣教師資料における四字語の構成パターンおよび蘭学資料との比較

構成パターン	語数 (%)	語例	蘭学資料
2+2型	294 (82.8)	飲食+失調, 感動+精神, 天然+津液, 同性+電気	514 (91.6)
3+1型	38 (10.7)	火輪車+道, 新聞紙+局, 全吸鉄+性, 蓄電気+器	40 (7.1)
1+3型	19 (5.4)	最+近日点, 細+回血管, 上+大血管, 地+摂引力	3 (0.6)
1+1+1+1型	4 (1.1)	士+農+工+商, 人+畜+房+宇, 男+女+老+幼	4 (0.7)
合計	355		561

これによって、2+2型の四字語は全体の82.8%を占めており、語数が圧倒的に多いことがよくわかるが、ただし、2+2型四字漢語が全体の91.6%を占めている蘭学資料に比べ、やや低い数字だといわなければならない。また、宣教師資料にある3+1型と1+3型の四字語は蘭学資料よりやや高めの比率になっていることにも留意すべきである。本稿では、主として宣教師資料の2+2型四字語について詳しく検討していくが、最後には、3+1型の四字語もとあげて蘭学資料の同類語との比較に触れたい。

3. 二字語基の品詞性と結合関係

2+2型四字語を、前部二字語基と後部二字語基の二つに分けて検討する場合、まずそれぞれの品詞性が問題になる。この点に関しては、蘭学資料の2+2型四字漢語と同様に、すべての二字語基を、名詞性語基(N)・動詞性語基(V)・形容詞性語基(A)の3種類に分類することができた。その分布は表3の通りである。

表3 宣教師資料における二字語基の品詞性および蘭学資料との比較

	前部二字語基		後部二字語基	
	宣教師資料	蘭学資料での比率	宣教師資料	蘭学資料での比率
名詞性語基 (N)	157 (53.4%)	70.6%	201 (68.4%)	26.9%
動詞性語基 (V)	115 (39.1%)	24.9%	75 (25.5%)	59.7%
形容詞性語基 (A)	22 (7.5%)	4.5%	18 (6.1%)	13.4%
合計	294 (100%)	100%	294 (100%)	100%

宣教師資料だけで品詞の比率が高いか低いかを見てもあまり意味がないが、蘭学資料と対照してみれば、双方の格差が各品詞にわたって見られることが確認できる。たとえば、前部二字語基のほうを見てみると、宣教師資料では、名詞性語基(N)が53.4%を占めているのに比べ、蘭学資料では、それが70.6%となっており、17.2ポイントも高い。これとは反対に、宣教師資料の動

⁴ 宣教師資料では中国語の旧字体が使われているが、本稿では、誤解が生じない限り、本来の中国語の表記を現行の日本漢字の字体になおした。なお、比較に用いた、蘭学資料の四字漢語の数字・データなどは、朱京偉(2011c)に基づいている。

詞性語基 (V) が 39.1% を占めているのに比べ、蘭学資料のそれは 24.9% で、14.2 ポイントも低くなっている。また、後部二字語基のほうを見ると、宣教師資料の名詞性語基 (N) が 68.4% を占めていて、蘭学資料の 26.9% よりずっと高くなっている一方、動詞性語基 (V) では、宣教師資料の 25.5% が蘭学資料の 59.7% に比べ、相当低い数値というべきであろう。形容詞性語基 (A) でも、宣教師資料の 6.1% は、蘭学資料の 13.4% より大幅に低下している。つまり、前部二字語基と後部二字語基のどちらにおいても、日中間の各品詞の比率が、一方が高ければ他方が低いといったような、分布上の偏りが見受けられる。

なぜ、日中間にこのような品詞分布の偏りが存在するのか。これを解明するには、語基の品詞性ととも、前部二字語基と後部二字語基がどのような文法的結合関係で結ばれているかを調べ、語構成レベルでの日中対照を行なう必要がある。蘭学資料の四字漢語をとりあげた小論では、四字漢語内部の結合関係を検討し分類する方法について述べたが⁵、宣教師資料の四字語もそれと同様な基準で、主述関係・修飾関係・並列関係・客述関係・述客関係などの結合パターンに分類することができる。結合パターンの振り分けにあたって、日本漢語の語形や語構成に類似するものなら問題にならないが、中国語独特の語構成を持つ四字語に遭遇した場合でも、なるべく日本語の語構成分析の方法を取り入れて、日中間で折り合えるような接点を探りながら、振り分けの作業を進めてきた。

たとえば、「飲食失調」という語は、名詞性語基 (N) と動詞性語基 (V) の組み合わせで、「飲食が失調する」としか語義の解釈が成り立たないので、N+V 主述関係の四字語ということになる。これは四字語の語構成が日本漢語と類似する場合の例である。一方、「回血管」は、字面に沿って読み下していくと、おおよそ「血液を回送するための、合わせた血管」といった意味なので、V+N 連体修飾関係の四字語だと考えられる。ただし、「回血」のような V+N 述客構造と「血管」のような V+N 連体修飾構造を二字語基に用いて四字語を造り出すのは日本漢語にあまり見当たらないパターンで、日本人に理解しにくい語構成といえよう。これは、四字語の語構成で日本漢語とかけ離れた場合の例にあたる。

このような語構成判断の作業を経て、宣教師資料にある 2+2 型四字語の結合関係は、蘭学資料の四字漢語と対照できるように、表 4 の形でまとめることができる⁶。

⁵ 朱京偉 (2011c) の第 3 節を参照。

⁶ 表 4 にある各結合関係の配列順は、朱京偉 (2011c: 169) の表 4 に基づいている。ただし、表中の「述客関係」は、中国語独自の V+O 構造 (述語+客語) をさすもので、日本語の O+V 構造 (客語+述語) とはちょうど語順が逆になっている。そのため、「蘭学資料での比率」では日本語の「客述関係」を対応させている。その内容については、4.5 を参照。

表4 宣教師資料にある2+2型四字語の結合関係

結合関係		語数 (%)	語例	蘭学資料での比率	
主述関係 23 (7.8%)	N+V	14 (4.7%)	飲食+失調, 機関+発動, 子宮+収縮	30.3%	42.2%
	N+A	9 (3.1%)	飲酒+過多, 相棋+有力, 体質+純全	11.9%	
連体修飾関係 164 (55.8%)	N+N	104 (35.4%)	西国+医術, 天気+圧力, 脳胞+炎証	17.1%	25.7%
	V+N	47 (16.0%)	回血+合管, 光行+速率, 通信+郵車	7.0%	
	A+N	13 (4.4%)	異性+電気, 円軟+細胞, 微糸+血管	1.6%	
並列関係 57 (19.4%)	V+V	31 (10.6%)	管理+保護, 招兵+徴税, 半戦+半和	17.7%	19.8%
	N+N	18 (6.1%)	故土+異邦, 四肢+百体, 内政+外交	1.1%	
	A+A	8 (2.7%)	胆大+心細, 明練+通達, 力微+勢緩	0.6%	
	V+A	0		0.4%	
述客関係 21 (7.1%)	V+N	21 (7.1%)	運行+筋脈, 製造+新血, 補養+人身	客述関係	9.0%
連用修飾関係 29 (9.9%)	V+V	16 (5.5%)	協力+同戦, 合力+吸引, 制法+徴税	0	3.3%
	N+V	11 (3.8%)	飲食+養身, 月力+摂引, 電報+通信	1.4%	
	A+V	1 (0.3%)	自然+生成	1.9%	
	N+A	1 (0.3%)	一路+平安	0	
合計		294		514	

上表によると、宣教師資料では、四字語の各結合パターンの中に大きなばらつきが見られるのが顕著な特徴だといえる。この中で、連体修飾関係の四字語が最も多く、抽出語全体の55.8%を占めている。並列関係(19.4%)の四字語が二位で、あとに続く連用修飾関係(9.9%)、主述関係(7.8%)および述客関係(7.1%)の四字語は、いずれも1割未満となっている。このような結合パターンの比率と順位を、蘭学資料の四字漢語と比較してみると、大きな相違があることに気付く。蘭学資料での結合パターンは、比率の高い順に、主述関係(42.2%)→連体修飾関係(25.7%)→並列関係(19.8%)→客述関係(9.0%)→連用修飾関係(3.3%)のようになっているが、この中で、とりわけ注目に値するのは、宣教師資料では連体修飾関係の四字語(55.8%)が極端に多く、主述関係の四字語(7.8%)がかなり少ないのに対して、蘭学資料では、主述関係の四字漢語(42.2%)が連体修飾関係の四字漢語(25.7%)を大幅に超えて最も多くなっているところである。

4. 2+2型の四字語の結合関係

日中双方に見られる結合パターンの差が何を意味するのか。以下では、表4の分類に基づいて四字語の結合パターンの中身を具体的に検討していきたい。

4.1 連体修飾関係の四字語

この種の四字語は、四字語全体の55.8%を占めており、名実ともに宣教師資料の四字語における代表的な語構成パターンといえる。連体修飾関係の下で、前部二字語基の品詞性の違いによって、さらにN+N, V+N, A+Nという3種の構造に細分することができる。

N+N連体修飾関係の四字語は、二つの名詞性二字語基(N)が修飾と被修飾の関係で結合さ

れたものである。たとえば、「斜面角度」と「皮内細胞」の2語は、前語基と後語基がともに名詞性のもので、それぞれ「斜面の角度」と「皮内の細胞」のように解釈できるので、N+N連体修飾関係の四字語になる。連体修飾関係の四字語の中でも、N+N構造の語が104語(35.4%)に達し、宣教師資料の四字語で最も語数の多いパターンである。この特徴は、蘭学資料にある同類語の17.1%という比率に比べると、いっそう顕著であり、宣教師資料ではN+N連体修飾関係の四字語がとくに多数造られていたことがわかる。

また、日本語の2+2型四字漢語では、蘭学の時代からも、自立する二字漢語がそれぞれ前語基と後語基になるのが普通で、これは現代の四字漢語に受け継がれた語構成的特徴の一つでもある。この視点に立って、宣教師資料にあるN+N連体修飾関係の四字語を調べてみると、たとえば、

火輪機関	火輪兵船	化学材料	海底電纜	格致質学	鼓形脆骨	国法権利
行星軌道	骨体質料	叉形電光	三角玻璃	人物体質	太陽火力	単線電路
地方法院	地面吸力	天主教師	日用炊飲	腦胞炎證	民間貨物	

のように、宣教師資料でも8割以上の四字語が自立する前語基と後語基を両方に持っていることが確認できた。ただし、残りの2割未満は、「成物形体、舌下脳筋、節筋形性、単層細胞、半主小国、皮内細胞、本国牌票、兩段脳筋」のように、前部二字語基が自立できないか、あるいは、「水族衆類、全身骨数、日月交食、灰質脳結」のように、後部二字語基が自立できない語となったりする。このような自立できない二字語基は、蘭学資料の四字漢語にはあまり見られず、現代日本語の2+2型四字漢語の語構成から見ても主流からはずれたものと思われる。この意味で、宣教師資料の四字語は、語基レベルの語構成において、日中両国の現代語との間に隔たりがあるといえよう。

V+N連体修飾関係の四字語は、動詞性の前部二字語基(V)が名詞性の後部二字語基(N)を修飾する関係で結合されたもので、前述のN+N構造に次いで語数が2番目に多いパターンとなっている。たとえば、「助力器具」と「汲水器具」は、「助力する器具」や「汲水する器具」のように解釈できるので、V+N連体修飾関係の四字語になる。一方、「折光遠鏡」と「光行速率」のように、片方の二字語基(下線)が日本語になく、字面から理解し難いものもあるが、こうした場合には、漢語語基の構造分析によって、「折光」は「光を屈折させる」の意、「光行」は「光が走る」の意と理解しておけば、この2語もV+N連体修飾関係の四字語に分類できる。この種の語として次の諸語もあげられる。

印書機器	外添属邦	吸鉄経線	護身牌票	交戦権利	自行軌道	自治内法
収斂補葉	常用螺旋	総理大臣	測量精器	着色玻璃	駐京欽使	跌打外傷
伝教牧師	漂白洋布	返照遠鏡	保険公司	捕食生物	防雷鉄索	

なお、蘭学資料にある同種語の36語(7.0%)に比べ、宣教師資料ではV+N連体修飾関係の四字語が47語(16.0%)となっているので、これも造語力の優勢なパターンの一つである。

4.2 並列関係の四字語

この種の四字語は、四字語全体の 19.4% を占め、連体修飾関係の四字語に次いで二番目に多いものである。並列関係の四字語は、品詞性の同じ前語基と後語基 (V+V, N+N, A+A) からなり、しかも、語基同士が語義の形成においてほぼ同等の役割を担っているという特徴を持つ。たとえば、「管理保護」は「管理することと保護すること」の意、「征服割拠」は「征服することと割拠すること」と解釈できるので、V+V 並列関係の四字語ということになる。また、「内政外交」と「智能技巧」は、文字通り「内政と外交」「智能と技巧」の意味を表しているので、N+N 並列関係の四字語になる。「力微勢緩」と「胆大心細」はそれぞれ「力が微小で、勢いが緩やかだ」「度胸が大きく、心遣いが細かい」と解釈できるので、A+A 並列関係の四字語に分類できる。

一方、蘭学資料では、並列関係の四字漢語が全体の 19.8% を占め、宣教師資料とほぼ変わらない比率となっているが、語数は 102 語もあるので、宣教師資料以上に多くの並列関係の語が使われていることがわかる。ただし、語基レベルの語構成に注目すると、蘭学資料の並列関係では、「運轉動搖 (V+V)、形状容貌 (N+N)、柔軟厚实 (A+A)」のように、並列関係を持ち、しかも自立できる二字語基で構成される四字漢語がほとんどなのに対し、宣教師資料の並列関係では、たとえば、「去皮存液 (皮を取り、液を残す→V+V)、時異世殊 (時が異なり、世が違う→V+V)」「故土異邦 (古い郷土と異なる国→N+N)」「才浅学疏 (才能が浅く、学問に疎い→A+A)」のように、語基が中国語式の述客関係や主述関係を持ち、しかも自立できない二字語基で構成される四字語が半数近くを占めている。次にあげた諸例もこのような構造の語基を持っているものである。

(V+V)	置郵通信	蕩産廢業	含生負性	呼群引類	開山破路	屈己順命
	探原索本	拔樹掀石	招兵徵稅	所見所聞	安居樂業	久安長治
(N+N)	傍支別派	片語單詞	靈機妙樞	精汁水液		
(A+A)	生順死安	力強性妬	識広学精	氣惡質汚	胆大心細	

蘭学資料の二字語基にはこのような構造があまり見当たらないので、日中間では二字語基の結合パターンが一致していても、語基内部の語構成となると、なお相違があることに留意すべきである。

4.3 連用修飾関係の四字語

主として、動詞性・名詞性などの前部二字語基 (V・N) が動詞性の後部二字語基 (V) を修飾・限定する関係で結合される四字語をさす。語数が少なく、全体での比率 (9.9%) も低いが、蘭学資料の同じパターン (3.3%) に比べれば、それを上回る造語力を見せている。

V+V 連用修飾関係の四字語は、動詞性の前語基でなんらかの条件・手段を示し、語全体の中心的な意味を担う動詞性の後語基にかかっていくような構造なので、前述の V+V 並列関係と異なる。たとえば、「循環流通」において、「循環」と「流通」は単なる並列を意味するよりも、「循環する形で流通していく」と解釈したほうがもとの文脈に合致するので、V+V 連用修飾関係の四字語に分類できる。「制法徵稅」は「法を制定して徵稅する」の意なので、前語基の「制法」が条件・手段を示す連用修飾語として、後語基の「徵稅」にかかっていると思われ、これも V+

V 連用修飾関係の四字語になる。

ただし、語基レベルの語構成を見ると、V+V 連用修飾関係には、「駛船寄信（船を走らせて便りを送る）、造鉄引電（鉄を造って電気を引く）」のように、中国語式の述客関係を持つ二字語基で構成される四字語が数多く見られる。これは、前項 4.2 の V+V 並列関係の四字語でも触れたように、蘭学資料の動詞性語基にはあまり見られない構造で、「合邦制法、合力吸引、水沸化氣、製針指南、転磨行船、秉公断結」なども同じ構造の語基を持つ例である。また、宣教師資料では、V+V 並列関係の四字語（10.6%）と V+V 連用修飾関係の四字語（5.5%）がともに見られるが、蘭学資料では、V+V 構造といえば、そのほとんどが V+V 並列関係の四字漢語（17.7%）ばかりであり、V+V 連用修飾関係の四字漢語はない。この点も、今後の調査でさらに裏付けを得られれば、日中の四字語における語構成上の相違点として指摘できそうである。

N+V 連用修飾関係とは、名詞性の前語基（N）が条件・手段を示す連用修飾語として、動詞性の後語基（V）を限定・修飾する結合パターンである。たとえば、「電報通信」は「電報で通信する」の意、「水気運機」は「水蒸気によって機械を動かす」の意なので、2 語とも N+V 連用修飾関係の四字語と判断できる。これと同様に、「陰陽伝引、飲食養身、水気引水、電気推引、電気伝信、病後失調」などもこの種の語として分類できる。語数は全体的に少ないが、蘭学資料には同じパターンの語がもっと少なく、「子宮分娩、実性失血、定時発歇、腹疾喘息」などの 7 語しかなかった。

4.4 主述関係の四字語

名詞性の前語基（N）と動詞性・形容詞性の後語基（V・A）が主語と述語の関係で結合される四字語をさす。たとえば、「肌肉収縮」は、名詞性語基（N）と動詞性語基（V）の結びつきで「筋肉が収縮する」の意なので、N+V 主述関係の四字語になる。「鉛丸放出、機関発動、国使昇降、三位一体、三質遞変、食物消化、知覚運動、万物生化」などもこの種の語に属する。また、「飲酒過多」は、名詞性語基（N）と形容詞性語基（A）の結びつきで「飲酒が多すぎる」の意なので、N+A 主述関係の四字語に分類できる。この種の語には「安逸過度、意味深長、国勢均平、性格難移、相摂有力、体質純全」などもある。

主述関係の四字語で最も注目に値するのは、蘭学資料の同類語との間に見られる出現傾向の大きな開きである。宣教師資料では、主述関係の四字語がわずか 23 語で、四字語全体の 7.8% に過ぎないのに対して、蘭学資料では、主述関係の四字漢語が 217 語に達し、四字漢語全体の 42.2% も占めている。なぜ日中間にこれほどの開きができたのか。その理由として考えられるのは、蘭学資料の四字漢語における主述関係の認定方法である。蘭学資料では、四字漢語の語尾の接続形式によって「動詞接続」「形容詞接続」「名詞接続」といった違いが見られる⁷。たとえば、

- ・或ハ感覚過敏ヲ兼ル者、或ハ死後其屍ヲ解剖スレバ…。(『扶氏經驗遺訓』卷四)
- ・身体諸部ヲ榮養スルコト無フシテ精力乏弱、神志況重ヲ為ス。(『医範提綱』卷二)

⁷この問題については、朱京偉（2011c）の第 4 節を参照。

この2例の中で、「感覚過敏」と「精力乏弱」はともに「名詞接続」の形であるが、それぞれ「感覚が過敏である」「精力が乏弱である」と理解すれば、N+A 主述関係の四字漢語になる。しかし、後語基を名詞としてとらえると、語構成は「感覚の過敏」「精力の乏弱」のような形に変わり、N+N 連体修飾関係になる可能性もある。このような場合、筆者は語基の本来の品詞性にしがたい、N+A 主述関係の四字漢語として分類したため、主述関係の語数の増加にある程度の影響を与えたものと思われる⁸。ただし、N+A 主述関係からN+N 連体修飾関係への移行は、後語基が形容詞から名詞へ自由に切り替えられるかどうかという問題があるほか、前語基と後語基の意味的關係によって制約を受ける場合もあるので、認定方法以外の要因と合わせて検討すべきである。

4.5 述客関係の四字語

動詞性の前語基 (V) と名詞性の後語基 (N) が中国語式の V+O 構造 (述語+客語) で結合された四字語で、日本語の O+V 構造 (客語+述語) とは語順が逆になっている。たとえば、「収聚+電気」は「電気を寄せ集める」の意、「補養人身」は「人の体に栄養を補給する」の意なので、2語とも V+N 述客関係の四字語になる。この種の語として、「運行筋脈、化分物質、感動精神、交渉事件、搾化食物、滋補身體、自立門戸、納入食管、培養血脈、備預新血、輔助消化、養育身體」などもあげられる。むろん、清末以前の中国語では、漢字4字の文字列でも、主語と述語の関係、または、述語と客語の関係が成り立っていれば、一つの文 (センテンス) になりうるので、ここにあげた用例は四字語というよりも文であるという考え方もあるが、蘭学資料の四字漢語との対照を行ない、現代中国語の四字語の由来を探るのに必要な一環であるので、本稿では、なるべく4字単位の用例を多く集めて検討してみることにした。

宣教師資料の V+N 述客関係の四字語に対して、蘭学資料には、語順が逆になる N+V 客述関係の四字漢語がある。この2種類の語は、それぞれ、日中双方独自の語構成パターンを代表している。

5. 二字語基の造語力

宣教師資料で抽出した四字語には、複数の資料にわたって用いられたものが極めて少なく、4資料共通に見られるのは「下牙床骨」の1語だけ、2資料共通に見られるのは「微糸血管、地心吸力、心右上房」などの10語にとどまる。その他はみな1語1用例だけの四字語である。なお、「火輪車路」は『遐迹貫珍』(1853)と『六合叢談』(1857)に、「火輪車道」は『博物新編』(1855)と『格物入門』(1868)にそれぞれ見られるように、語形類似の語でも統一されることなく、複数の資料にそのまま使われている。このような事情からは、宣教師資料にある四字語はまだ定着度が低く、臨時語的な性格が強いという印象を受けざるを得ない。

一方、二字語基の造語力はどうなっているのか。これを調べるには、前部二字語基と後部二字語基に分けて別々に取り扱うと同時に、蘭学資料での調査結果と比較するために、それと同様な集計の方法を取り入れることが必要である。まず、宣教師資料にある四字語の前部二字語基につ

⁸ 朱京偉 (2011c) の 4.1 を参照。

いて、造語数の多い順に語基と語例を示しておこう。

表5 前部二字語基の造語力

造語数	語基数	語基と語例
7	1	火輪 (一兵船, 一機関, 一機具, 一機器, 一師船, 一郵船, 一舟車)
6	1	回血 (一合管, 一会管, 一門管, 一繞管, 一微管, 一総管)
5	1	電気 (一伝成, 一伝信, 一動力, 一推引, 一阻力)
4	1	民間 (一産業, 一大会, 一貨物, 一私産)
3	6	玻璃 (一曲管, 一透鏡, 一凹面), 地球 (一軌道, 一摂力, 一説略), 格致 (一公会, 一太学, 一質学), 国法 (一律例, 一権利, 一政治), 水気 (一引水, 一運機, 一漲力), 飲食 (一男女, 一失調, 一養身)
2	11	地方 (一法院, 一律法), 骨体 (一内形, 一質料), 火車 (一鉄路, 一鉄道), 肌肉 (一収縮, 一性情), 機関 (一発動, 一運動), 交戦 (一権利, 一条規), 流質 (一圧力, 一重学), 形体 (一気象, 一式様), 助力 (一器具, 一原器), 自立 (一門戸, 一自主), 自治 (一内法, 一自主)
1	232	安居 (一楽業), 安逸 (一過度), 凹面 (一凹鏡), 半戦 (一半和), 保国 (一保民), 保険 (一公司), 備予, 本国, 変化, 乗公, 病後, 哺乳, 捕食, 補養, 才浅, など
(294)	253	(1 語基あたりの平均造語数は約 1.16 語になる)

表5によると、前部二字語基で最も多くの四字語を造り出したのは造語数7語の「火輪一」である。その次に、造語数6語の「回血一」と造語数5語の「電気一」がある。しかし、全体的に見て、造語数の多い語基がかなり少なく、造語数2語以上のものを合わせてもわずか21語に過ぎない。これに対し、造語数1語だけの前部二字語基が232に達し、異なり語基数の91.7%を占めている。そのため、1語基あたりの平均造語数は1.16語という低い数値になっている。

つづいて、後部二字語基についても、同じ方法で語基ごとに四字語の造語数を調べ、それぞれの語基の造語力をまとめてみた。その結果は表6の通りである。

表6 後部二字語基の造語力

造語数	語基数	語基と語例
5	1	電気 (収聚一, 同性一, 同種一, 異性一, 異種一)
4	5	軌道 (地球一, 行星一, 圓日一, 自行一), 脳筋 (脊髓一, 兩段一, 舌下一, 自和一), 器具 (助力一, 行囊一, 汲水一, 澆地一), 圧力 (流質一, 風氣一, 空気一, 天気一), 総管 (回血一, 廻血一, 精液一, 血脈一)
3	7	彗星 (有髪一, 有尾一, 有鬚一), 機器 (火輪一, 印書一, 織造一), 細胞 (単層一, 皮内一, 凹軟一), 消化 (補助一, 磨鍊一, 食物一), 遠鏡 (返照一, 回光一, 折光一), 運動 (機関一, 機件一, 知覚一), 質学 (格致一, 地理一, 天文一)
2	21	玻璃 (三角一, 着色一), 大会 (民間一, 客商一), 法院 (地方一, 戦利一), 官署 (領事一, 事物一), 律例 (国法一, 万国一), 牌票 (本国一, 護身一), 権利 (国法一, 交戦一), 身体 (養育一, 滋補一), 生物 (哺乳一, 捕食一), 失調 (飲食一, 病後一), 収縮 (肌肉一, 子宮一), 条約 (交戦一, 和戦一), 鉄道 (火車一, 輪車一), 通信 (電報一, 電線一), 凸鏡 (単面一, 双面一), 文字 (言語一, 語言一), 吸力 (地面一, 地心一), 新血 (備予一, 製造一), 一体 (三位一, 視為一), 徴税 (招兵一, 制法一), 自主 (自立一, 自治一)
1	206	安養 (平隊一), 百体 (四肢一), 半和 (半戦一), 胞膜 (筋節一), 保護 (管理一), 保民 (保国一), 宝石 (金剛一), 変化, 別派, 兵船, 補薬, 不休, 材料, 財流, など
(294)	240	(1 語基あたりの平均造語数は約 1.23 語になる)

後部二字語基で、造語数の最も多いのは四字語 5 語を造り出した「一電気」であり、造語数 4 語の「一軌道、一脳筋」などの 5 語がこれに続く。造語数 2 語以上のものは計 34 語で、前部二字語基に比べてやや多くなっているが、造語数 1 語だけの語基は 206 もあり、語基数全体の 85.8% を占め、圧倒的に多い。

後部二字語基の平均造語数は約 1.23 語で、前部二字語基の 1.16 語と比べれば、1 語基あたりの造語力はやや高くなっている。ただし、蘭学資料の四字語では、前語基と後語基の平均造語数がそれぞれ 1.55 語と 1.39 語なので、いずれも宣教師資料のそれを上回っている。双方の格差は、次の表 7 で示しているように、主として造語数の多い語基のあり方と直接関連していると思われる。

表 7 宣教師資料と蘭学資料における語基の造語力の比較

造語数	前部二字語基の語数		後部二字語基の語数	
	宣教師資料	蘭学資料	宣教師資料	蘭学資料
16		神経 (1)		
10		角膜, 眼瞼, 血液 (3)		
9				神経 (1)
7	火輪 (1)	大気, 瞳孔 (2)		
6	回血 (1)	栄養, 眼球, 粘液, 物体 (4)		引力, 衝動, 分子 (3)
5	電気 (1)	精神, 脳髓 (2)	電気 (1)	過敏, 凝結, 作用, 速力, 軟骨, 閉塞 (6)
4	民間 (1)	感覚, 活潑, 呼吸, 身体, 組織, 大便, 弾力, 分子, 膨脹 (9)	軌道, 脳筋, 器具, 圧力, 総管 (5)	運営, 運動, 過多, 下利, 三角, 親和, 衰弱, 動物, 分解, 変常 (10)
合計	4 語	21 語	6 語	20 語

表 7 では、宣教師資料と蘭学資料に分けて、造語数 4 語以上の前語基と後語基をリストアップした。この表からは、前語基と後語基を問わず、いずれも蘭学資料側の語数が多いことが読み取れる。たとえば、1 語基あたりの造語数について見ると、宣教師資料では最も多い造語数が 7 語であるが、蘭学資料では造語数が 9-16 語の語基も見られる。また、造語数 4 語以上の語基の総数を見ると、宣教師資料では前語基の 4 語と後語基の 6 語にとどまるのに対して、蘭学資料では前部の 21 語と後部の 20 語になっており、大差で語数の優勢を見せているのである。

要するに、現代中国語の立場に立って、宣教師資料の四字語をながめると、いまだに語基の造語力が弱く、結合の臨時性が強い段階にあるように感じられ、現代中国語との隔たりが相当大きいといわざるを得ない。一方、蘭学資料の四字漢語は、宣教師資料の四字語に比べ、語基の造語力などの点で一步進んだものの、こちらも現代日本語の四字漢語の語構成的特徴が十分に備わっていたとはいえない状況にある。

6. 二字語基の出自状況

漢訳洋学書は、欧米出身の宣教師達が中国にいる間に中国語で書いたものである。長年の在華

生活を経験し、中国語にもよく通じるとはいえ、中国語で本を書くとなると、やはり中国人の協力者（博識の文人や科学者）が必要になる。漢訳洋学書の巻頭には「○○口訳、○○筆述」などの記述があるように、宣教師が洋学書の内容を口頭で中国語に訳し、中国人の協力者がそれを書きとめて、体裁の整った文章に仕上げていくという方法がよく用いられた。このように完成された漢訳洋学書には、漢籍からの既存語と宣教師達による新造語がそれぞれのくらいあるか、また、宣教師達の新造語は先行の小論でとりあげた蘭学者の新造語に比べてどう違うかを明らかにする必要がある。そのため、宣教師資料の2+2型四字語を対象に、その1語1語につき、漢籍での出典があるかどうかを調べてみた。

漢籍での出典を調べるのに《四庫全書》(電子版)を用いた⁹。まずは、宣教師資料にある四字語を《四庫全書》(電子版)で検索してみて、そのままの形で用例が見付からなかった語については、さらに前部二字語基と後部二字語基の両方に分けて、別々に出典を求めることにした。調査の結果は、「4字出典あり」「2字出典あり」「2字出典なし」という三つのパターンに振り分けて、これを年次順に並べた各資料の下で整理しておくと、表8と表9の形になる。

表8 前部二字語基の出自状況

資料名	4字出典あり	2字出典あり	2字出典なし	資料別合計
1853《遐邇貫珍》麦都思編	10 (21.3)	23 (10.7)	3 (9.1)	36 (12.2)
1854《博物新編》合信著	0	15 (7.0)	3 (9.1)	18 (6.1)
1857《六合叢談》偉烈亜力編	11 (23.4)	13 (6.1)	2 (6.1)	26 (8.8)
1858《内科新説》合信著	3 (6.4)	10 (4.7)	2 (6.1)	15 (5.1)
1864《万国公法》丁韞良訳	6 (12.8)	38 (17.8)	3 (9.1)	47 (16.0)
1868《格物入門》丁韞良著	2 (4.2)	29 (13.5)	1 (3.0)	32 (10.9)
1876《格物探原》韋廉臣著	6 (12.8)	18 (8.4)	0	24 (8.2)
1887《電学須知》傅蘭雅著	2 (4.2)	9 (4.2)	4 (12.0)	15 (5.1)
1890《西国天学源流》王韜訳	1 (2.2)	7 (3.3)	1 (3.0)	9 (3.1)
1890《重学浅説》王韜訳	0	9 (4.2)	3 (9.1)	12 (4.1)
1894《全体須知》傅蘭雅著	4 (8.5)	21 (9.8)	7 (21.2)	32 (10.9)
1896《格致質学啓蒙》艾約瑟著	0	10 (4.7)	2 (6.1)	12 (4.1)
1896《身理啓蒙》艾約瑟著	2 (4.2)	12 (5.6)	2 (6.1)	16 (5.4)
出典有無の合計	47 (100)	214 (100)	33 (100)	294 (100)

() 内は%。以下同じ。

表8では、各資料の項目ごとの比率と、「資料別合計」で示した当該資料の全抽出語での比率を照合することによって、出自状況の偏りをとらえることができる¹⁰。たとえば、《遐邇貫珍》《六合叢談》《内科新説》《格物探原》の4資料では、「4字出典あり」の語（網掛けの部分）が当該

⁹ 《四庫全書》は、中国歴代の典籍が3460余種も収録され、清の乾隆帝の時（1781）に完成した大規模の百科叢書である。同書で用例が見付からなければ、当該の語は近代以前の中国語にないものとはほぼ断定できる。

¹⁰ 各資料について、3パターンの出自状況のうち、当該資料の全抽出語での比率（資料別合計）を最も大きく上回っている数値に網掛けした。

資料の全抽出語での比率（資料別合計）を最も大きく上回っているため、漢籍由来の四字語がほかの資料よりも多く使われていることになる。このほか、《万国公法》《格物入門》《西国天学源流》の3資料における「2字出典あり」の語（網掛けの部分）も、《博物新編》《電学須知》《重学浅説》などの6資料における「2字出典なし」の語（網掛けの部分）も、それぞれ当該資料の全抽出語での比率を最も大きく上回っていることから、ほかの資料に比べて多用される傾向があると指摘できる。

なお、全体から見て、「4字出典あり」の語が早期の資料に、「2字出典あり」の語が中期の資料に、「2字出典なし」の語が後期の資料に比較的多く見られるようになっている。この分布上の特徴からは、時代が下るにつれ、宣教師による新造語がしだいに増えていることが読み取れる。

また、後部二字語基の出自状況に目を向けると、表9で示したように、具体的な数字にずれがあるものの、基本的には、前部二字語基の場合とほぼ同様な傾向が読み取れる。たとえば、「4字出典あり」の語と「2字出典あり」の語は早期と中期の資料に多く見られ、後期の資料になると、「2字出典なし」の語の比率が高くなるように分布している。

表9 後部二字語基の出自状況

資料名	4字出典あり	2字出典あり	2字出典なし	資料別合計
1853《遐邇貫珍》麦都思編	10 (21.3)	19 (10.1)	7 (11.9)	36 (12.2)
1854《博物新編》合信著	0	16 (8.5)	2 (3.4)	18 (6.1)
1857《六合叢談》偉烈亜力編	11 (23.4)	10 (5.3)	5 (8.5)	26 (8.8)
1858《内科新説》合信著	3 (6.4)	11 (5.9)	1 (1.7)	15 (5.1)
1864《万国公法》丁韞良訳	6 (12.8)	38 (20.2)	3 (5.1)	47 (16.0)
1868《格物入門》丁韞良著	2 (4.2)	20 (10.6)	10 (16.9)	32 (10.9)
1876《格物探原》韋廉臣著	6 (12.8)	13 (6.9)	5 (8.5)	24 (8.2)
1887《電学須知》傅蘭雅著	2 (4.2)	9 (4.8)	4 (6.8)	15 (5.1)
1890《西国天学源流》王韜訳	1 (2.2)	6 (3.2)	2 (3.4)	9 (3.1)
1890《重学浅説》王韜訳	0	8 (4.3)	4 (6.8)	12 (4.1)
1894《全体須知》傅蘭雅著	4 (8.5)	22 (11.7)	6 (10.1)	32 (10.9)
1896《格致質学啓蒙》艾約瑟著	0	6 (3.2)	6 (10.1)	12 (4.1)
1896《身理啓蒙》艾約瑟著	2 (4.2)	10 (5.3)	4 (6.8)	16 (5.4)
出典有無の合計	47 (100)	188 (100)	59 (100)	294 (100)

宣教師資料における語基の出自状況は以上述べた通りであるが、ここで視点を変えて、「4字出典あり」「2字出典あり」「2字出典なし」といった3パターンの語は前語基と後語基で、どのように分布しているかをとりあげ、また、この出自別から見た前語基と後語基の相違に基づいて、宣教師資料と蘭学資料におけるそれぞれの特徴をとらえてみたい。

表 10 宣教師資料と蘭学資料における語基の出自状況¹¹

資料	語基	4字出典あり	2字出典あり	2字出典なし	資料別合計
宣教師資料	前部二字語基	47 (16.0)	214 (72.8)	33 (11.2)	294
	後部二字語基	47 (16.0)	188 (63.9)	59 (20.1)	294
蘭学資料	前部二字語基	29 (5.6)	360 (70.1)	125 (24.3)	514
	後部二字語基	29 (5.6)	408 (79.4)	77 (15.0)	514

表 10 によると、「4字出典あり」の語では、宣教師資料での比率(16.0%)が蘭学資料のそれ(5.6%)より明らかに高い。宣教師資料は、欧米からの宣教師が中国人の科学者や文人の協力を得て完成された訳書と著書がほとんどなので、中国語の文章に仕上げられた段階において、とくに中国人協力者の文筆力に頼るところが大きかったことから、その中で「4字出典あり」の語がより多く使われたのは自然の結果だと思われる。

また、宣教師資料では、前部二字語基に「2字出典あり」の語(72.8%)が圧倒的に多く、「2字出典なし」の語(11.2%)が比較的少ないが、後部二字語基になると、前者の優勢(63.9%)は保たれているものの、後者の比率(20.1%)が大幅に拡大している。つまり、前部二字語基に比べ、後部二字語基には宣教師達の新造語がより多く使われているということになる。これに対して、蘭学資料では、後部二字語基にある「2字出典あり」の語(79.4%)が前部二字語基のそれ(70.1%)よりも多くなっており、その反面、前部二字語基にある「2字出典なし」の語(24.3%)が比較的多く、後部二字語基のそれ(15.0%)を大幅に上回っている。つまり、宣教師資料の場合と違って、蘭学資料では、前部二字語基には蘭学者達の新造語がより多く使われる傾向が見られる。このような現象を踏まえて、前掲の表 4 に基づいてまとめた 2+2 型四字(漢)語の結合関係の特徴と関連付けると、次のことがいえる。つまり、宣教師資料では、連体修飾関係の四字語(55.8%)が多いことと、後部二字語基に新造語(20.1%)が多いことを考え合わせると、四字語の後部において、被修飾語を担う名詞が新造語の主体になる。一方、蘭学資料では、主述関係の四字漢語(42.2%)が多い上、前部二字語基に新造語(24.3%)が多用されていることで、四字漢語の前部において、主語をつとめる名詞が新造語の主体にあっている。

以下では、実例をあげながら、「4字出典あり」「2字出典あり」「2字出典なし」の3パターンの中身を詳しく検討する。

6.1 「4字出典あり」の語

「4字出典あり」の語とは、古い漢籍において、宣教師資料にある四字語と同形の用例が見られるものである。たとえば、「遊移影響」という語は、宣教師資料の《内科新説》(1858, 巻上)で“惟中土医書, 悉皆遊移影響, 欲将西国医法流传中土, 大是難事。”(ただ中国の医書はみな影と響きの如く不確かなので、西洋の医術を中国に伝えようと思うなら大いに難事だ)のように使

¹¹ 蘭学資料の四字漢語の場合では、表中にある3パターンのほか「2字新義あり」のパターンもあったが、宣教師資料にはこれに相当する項目がないため、「2字新義あり」の語を「2字出典なし」の語に加算した語数(18+107と7+70)の比率(24.3%と15.0%)を記入した。詳しくは朱京偉(2011c)の表9と表10を参照。

われている。しかし、《四庫全書》で調べてみると、清・允禄編《世宗憲皇帝上諭内閣》(1731, 卷98)には“若云欲行而未竟者, 此乃遊移影響之談, 巧卸其責於王矣。”(もし、行おうとして果たせなかったというなら、これは影と響きの如く不確かな話で、王の前で巧みにその責任を逃れようとするものだ)という一節があり、同形の四字語がそのまま見付かったので、「4字出典あり」の語と認定できる。

また、「知覚運動」は、《全体須知》(1894, 第5章)には“散布百体, 以達知覚運動, 此皆謂之腦気筋也。”(全身に分布し、以って知覚と運動を伝達する。これらはみな脳気筋というものだ)とあるが、これより早い用例は《四庫全書》から多数見出すことができた。たとえば、清・胡煦撰《周易函書別集》(18世紀初期, 卷9)には“先儒以性為体, 以情為用, 以知覚運動者為心。”(先儒が性を以って体とし、情を以って用とし、知覚と運動というものを以って心とする)のように使われている。したがって、「知覚運動」は「4字出典あり」の語として考えられる。このような四字語は宣教師資料において47語見られ、抽出語全体の16.0%を占めている。蘭学資料にある同種語の5.6%に比べ、明らかに高い数値といえよう。

「4字出典あり」の語をジャンルから見ると、「飲酒過多, 飲食男女, 往過來続, 四肢百体, 循環流通, 保国保民」のような専門用語以外の一般語や、「一視同仁, 含生負性, 口是心非, 自立門戸, 不可思議」のような四字熟語や慣用表現がかなり多いという特徴に気付く。そのためもあって、「4字出典あり」の語は、初期の総合雑誌である《遐邇貫珍》《六合叢談》などに多用されるが、後期の科学専門書になると、かなり少なくなっている。

また、語構成の面から見ると、「4字出典あり」の語には、V+V並列関係(安居樂業, 久安長治, 呼群引類, 所見所聞)とN+N並列関係(言語文字, 智能技巧, 土地疆界, 片語単語)のものがともに多く、合わせて約4割を占めている。注意したいのは、これらには、本稿の4.2で述べた、いわゆる中国語式の述客関係や主述関係を持ち、しかも自立できない二字語基で構成される四字語が多く含まれている。このほか、V+V連用修飾関係(交感変化, 経営創造, 循環流通, 力戦不休)や、N+N連体修飾関係(極樂世界, 兒女私情, 天地万物, 民間貨物)、および、N+V主述関係(飲酒過多, 飲食失調, 食物消化, 萬物生化)のものがそれぞれ2割近くを占めている。

これに対して、蘭学資料にある「4字出典あり」の語では、宣教師資料と違って、N+V, N+A主述関係の語が72.4%を占め、圧倒的強さを見せている¹²。日中双方の差をもたらした要因の一つは、中国語式のV+V, N+N並列関係の四字語がとくに多いという宣教師資料側の語構成的特徴にあると思われる。

6.2 「2字出典あり」の語

「2字出典あり」の語とは、古い漢籍において、四字語そのままの用例はないが、前部または後部二字語基と同形の用例が見られるものである。たとえば、宣教師資料の《万国公法》(1864)には「自治内法, 自治自主」や「国法權利, 交戦權利」などの四字語が使われている。四字語の

¹² 朱京偉 (2011c) の6.1を参照。

形で検索をかけても、古い漢籍での用例が見付からないが、前部二字語基の「自治」、または、後部二字語基の「権利」に限定して《四庫全書》で検索してみると、次のような用例が得られる。

- ・有司皆曰：民不能自治，故為法以禁之。（役人の言うには、庶民が自治できない故に、法を作ってこれを禁じるわけだ）《史記》（漢・司馬遷撰，紀元前91年，卷10）
- ・拳世非之不能阻也，権利誘之不可移也。（世を挙げてこれを非難しようと雖も阻止できず，権利で誘惑しても動揺しないものだ）《説易詳説》（宋・李光撰，12世紀中期，卷10）

このように、「自治」と「権利」は古い漢籍に存在した語であり、しかも、現代語においても基本義をくつがえすような意味変化が認められないので、「2字出典あり」の語に分類することができる。

前掲の表10によると、宣教師資料では、「2字出典あり」の語は前部二字語基と後部二字語基で、それぞれ72.8%と63.9%を占めている。つまり、宣教師資料の四字語では、語基のレベルで見ると、漢籍からの既存語を用いた二字語基が他の類に比べて最も多く使われている。一方、蘭学資料にある「2字出典あり」の比率は70.1%と79.4%となっているので、とりわけ、後部二字語基において、日中双方の差がはっきり現れている。宣教師資料にある「2字出典あり」の語は、次のように分布している。

表11 宣教師資料にある「2字出典あり」の語（異なり語数）

造語数	前部二字語基（188語）	後部二字語基（151語）
2-7	火輪、民間、玻璃、地球、格致、国法、水気、地方、骨体、火車、肌肉、機関、交戦、形体、助力、自立、自治（17語）	軌道、脳筋、器具、総管、彗星、機器、細胞、消化、遠鏡、運動、玻璃、大会、官署、律例、牌票、権利、身体、生物、収縮、条規、通信、吸力、新血、一体、徴税、自主（26語）
1	安逸、凹面、半戦、保険、本国、変化、乗公、哺乳、捕食、補養、など（171語）	安養、胞膜、保護、宝石、別派、兵船、補葉、材料、財源、常例、など（125語）

表11でわかるように、漢籍に由来した「2字出典あり」の語が最も多いとはいえ、造語数2語以上のものは、前語基と後語基を問わず、ともに語数が少なく、それぞれ17語（9.0%）と26語（17.2%）にとどまっており、残りはいずれも造語数1語だけのものである。また、前語基と後語基の両方に用いられたものはかなり少なく、「制法（制法徴税／合邦制法）、血脈（血脈総管／培養血脈）、形体（形体様式／成物形体）、体質（体質純全／人物体質）、螺旋（螺旋円周／常用螺旋）、玻璃（玻璃透鏡／三角玻璃）」の6語しかなかった。このような状況は、重要概念を担う二字語基の重複使用率が高く、これを中心に派生的な造語がなされたり、前語基と後語基の両方に用いられたりすることの多い現代中国語の四字語の語構成と比べて、未だに隔たりが大きいというべきであろう。

6.3 「2字出典なし」の語

「2字出典なし」の語とは、古い漢籍において、四字語の用例はもちろん、前部または後部二

字語基と同形の用例も見当たらないものである。この種の語は、もし日本側の資料により早い用例がないことが立証されれば、すなわち宣教師達の新造語になる。たとえば、「電気」という語を例にとって見ると、《博物新編》(1854)や《電学須知》(1887)などの宣教師資料から「電気推引、電気阻力、電気伝信、電気伝成、電気動力」などの四字語を抽出できたが、《四庫全書》で検索してみると、四字語そのままの形では、いずれも古い漢籍での用例が見付からなかった。しかも、二字語基の「電気」にしぼってみてもやはり用例が皆無であった。そのため、「電気」を「2字出典なし」の語としてあつかうことにした。

佐藤亨(2007)によると、「電気」は、アメリカの宣教師、裨治文撰による《大美聯邦志略》(1840)に、“其引電気之法、大率与火船引取水气之力、同功而异用。”(その電気を引く方法は、大体汽船で水蒸気の力を取り入れることと機能が同じで用途が異なる)とあるのが最初の用例で、のちに、川本幸民著『遠西奇器述』(1856)には「金銀塩の溶液に電気を通ずれば、其金銀電気の出づる物体に固著する者なり」とあるように、蘭学資料に伝えられたという¹³。このように見てくると、「電気」は宣教師達による新造語であることがわかる。

「2字出典なし」の語は、前述の「2字出典あり」の語に比べ、数がかなり少なくなり、前部二字語基と後部二字語基ではそれぞれ11.2%と20.1%を占めている。これは、蘭学資料にある同種語の24.3%と15.0%に照らしてみれば、宣教師資料の後語基(20.1%)と蘭学資料の前語基(24.3%)には、それぞれ、新造語が比較的多く用いられているということになる。宣教師資料にある「2字出典なし」の語を具体的にあげると、次表のようになる。

表 12 宣教師資料にある「2字出典なし」の語(異なり語数)

造語数	前部二字語基 (23 語)	後部二字語基 (46 語)
2-5	A) 回血, 電気, 流質 (3 語)	A) 電気, 圧力, 法院, 鉄道, 凸鏡, 吸力, B) 質学 (7 語)
1	A) 電報, 電線, 化学, 灰質, 機件, 漂白, 西医, 宣戦, 眼窩, B) 半主, 防雷, 骨衣, 光行, 合邦, 廻血, 節筋, 腦胞, 円軟, 月力, 榨化 (20 語)	A) 電纜, 電路, 廢料, 公司, 合頁, 機具, 速率, 鐵路, 透鏡, 新論, 血管, 郵車, 郵船, B) 半和, 存液, 公院, 骨数, 汗管, 合管, 合管, 肌線, 精器, 門管, 腦結, 破路, 気機, 曲管, 繞管, 摂力, 摂引, 師船, 式文, 微管, 炎証, 洋布, 引電, 円罩, 漲力, 質汚 (39 語)

表 12 からは、造語数 2 語以上のものが全体的に少なく、造語数 1 語だけのものが多数を占めるという分布上の傾向が確認できる。前者では、「質学」を除いて、その他の語はみな現代中国語に受け継がれている (A グループ) が、後者では、現代中国語に受け継がれている A グループの語と、現代語から消え去った B グループの語に振り分けられる。

「2字出典なし」の語の中で、日中同形語でありながら蘭学資料の用例が宣教師資料よりも先に出ている場合は、その語源判断が問題になりがちである。たとえば、「鉄道」は、《四庫全書》で検索した結果、古い漢籍には用例がなかったものの、宣教師資料の《格物入門》(1868)で「輪車鉄道、火車鉄道」などの四字語の二字語基として、次のように使われている。

¹³ 佐藤亨 (2007) の p. 640, 見出し語「電気」の用例と「意味・出自」欄の説明を参照。

- ・行船運車，修造輪車鐵道各事，用人極多。（船や車を動かしたり，汽車の鐵道を造ったりする各種の仕事は，かなり多くの人を使用しなければならない）《格物入門》（巻2，氣学）
- ・有石氏者，思藉火車鐵道以為電路，屢試不驗。（ストーン氏という者がいて，汽車の鐵道を電気の回路として使おうと思ったが，いく度試しても実らなかった）《格物入門》（巻4，電学）

一方，日本側の資料を見れば，蘭学資料には「鐵道」という語がなかったが，幕末の外遊日記などにおいて，宣教師資料よりも早い用例が見られる。たとえば，『航米日録』（1860）には「是ヲ以テ西洋人會議シテ此地ヲ借り，山ヲ削り谷ヲ埋メ鐵道ヲ築ク」の用例があるほか，『航魯紀行』（1866）には「大車の通路は別に汽車の如く鐵道をこしらへけり」のように，「鐵道」が使われていた¹⁴。日本側の用例が宣教師資料の用例より早いと見受けられるので，「鐵道」は日本で造られた和製漢語というべきであろう。ただし，双方用例の時間差がわずかで，しかも19世紀後半の宣教師資料が蘭学資料の用語から逆に影響されたような形跡がほとんどないことを考えれば，結果的には，「鐵道」はほぼ同じ時期に日中両国で別々に造られた語ではないかと推測される。

また，「圧力」は，これも古い漢籍での用例が見付からない語であるが，宣教師資料の《格物入門》（1868）と《格物探原》（1876）などでは，四字語「天气圧力，空氣圧力」の二字語基として，次のように使われている。

- ・天气圧力惟均，惟管中之酒不均，如天秤然，重頭必低落也。（大気の圧力はバランスが取れているが，ただ管の中の酒が均等な量ではないので，天秤棒の如く，重いほうは必ず低落する）《格物入門》（巻2，氣学）
- ・仮如耳内無空氣，外之空氣圧力独重，耳膜不勝，必致破裂。（もし耳の中に空氣が無く，外の空氣の圧力だけが重ければ，鼓膜は堪えられず，必ず破裂することになる）《格物探原》（首巻，論耳第21）

これに先立って，二字語「圧力」の用例は，すでに《六合叢談》（1857，第1号）に，“蓋地質自地面至地中，圧力漸重，……”（地質は地面から地中に至ると，圧力はしだいに重くなり，……）の形で出ていた。しかし，蘭学資料を調べると，下記の通り，宣教師資料より遥かに早い用例を見出すことができる。

- ・圧力去れば即ち本大に復す。圧力と弾力と，常に対待して等分なり。（『曆象新書』1798，中編，下巻）
- ・死力は即ち圧力の下行にして，其の物の重量及び下行時刻に由りて合成す。（『窮理通』1836，巻4）

佐藤亨（2007）では，「圧力」について，宣教師資料の用例よりも早い幕末の用例を掲げながらも，宣教師資料の影響で広まったとしているが，宣教師資料の用語に対する蘭学資料の影響が証明されない限り，「圧力」は日中両国で別々に造られた語としたほうが適切かと考える。

¹⁴ 佐藤亨（2007）のp.638，見出し語「鐵道」の用例を参照。

このほか、Aグループに属する「流質、吸力、血管」の出自も、慎重な判断が求められる事例である。宣教師資料では二字語基に使われる以外に二字語としての用例も見られる。

- ・凡物之有実質者，其伝通熱氣，較流質之物，尤易且速。（凡そ形の有る物質は，流体の物質に較べ，尤も熱気を伝え易くしかも速い）《遐邇貫珍》（1855，第7号，続地理撮要論）
- ・縁其体質甚軽，不能圧開水之吸力故耳。（其の物の質量が甚だ軽い故に，水の吸引力を押し退けることができない）《格物入門》（1868，巻1，力学）
- ・在動肉與骨之間，有最要血管及腦氣筋藏聚之處。（動く肉と骨の間には，最重要な血管及び神経の隠れ集まる処が有る）《遐邇貫珍》（1855，第1号，身体略論）

これに対して，蘭学資料にあるこの3語の最も早い用例をあげてみると，次のようになる。

- ・山物ハ堅硬凝固ノ体ト雖モ，其ノ始ハ必ス流質與（ト）土壤同ク溶解流動シ，土壤漸ク沈降シ以テ成ス。（『理学提要』1852，巻3）
- ・其余弾力，吸力，求心力など云るも，皆引力の別名なり。（『曆象新書』1789，中編，上巻）
- ・拡充排張甚シケレハ，血管縱弛シテ脈腫，血瘤等ヲ生シ……。（『扶氏經驗遺訓』1857，巻4）

双方の用例で見ると、「流質」と「吸力」は蘭学資料の用例が早い，「血管」はむしろ宣教師資料の用例が先に出ている。しかし，これだけでは，どれが日本製のものか，どれが中国製のものか，あるいは，どれが日中で別々に造られたものかを判断するのにまだ根拠が足りないように思われる。このように，宣教師資料と蘭学資料の間で，日中同形の二字語なら，語源が問題になることが少なくない。これは四字語のレベルで検討するよりも，二字語の語源調査を徹底させることで解明していく課題であろう。

ちなみに，前掲の表12でわかるように，前語基と後語基を問わず，現代中国語から消え去ったBグループの語が多数を占めている。つまり，宣教師資料の用語は，四字語の二字語基という側面から見ても，現代中国語に与えた影響が限られていることがうかがえる。

7. 日中資料の用語の共通度

本稿の調査で，宣教師資料と蘭学資料にはともに四字（漢）語が使われており，しかも，語構成においては，順位の差こそあれ，一方にあって他方ないパターンがほとんどないことが明らかになった。これを踏まえて，19世紀前半に全盛期を迎えた蘭学資料と19世紀後半から盛んになった宣教師資料の間で，用語の面での影響関係があったかどうかを探ってみる必要もあると思われる。この節では，四字語という側面から宣教師資料と蘭学資料における用語の共通度を調べることによって，この問題を明らかにしたい。

筆者が抽出した四字語の範囲で，日中共通の四字語は「食物消化」の1語だけで，蘭学資料と宣教師資料では，それぞれ次のように使われている。

- ・コレ甘脂ニテ其性ヲ鈍緩ニシ，食物消化ノ用ヲ妨レバナリ。或ハ其滋養スルコト甚フシテ，身体肥大ニ過ギ，屈伸便ナラズ。（『医範提綱』1805，巻3）

- ・食物消化之後，變成白漿，名曰糜粥。（食物が消化された後，白い汁に変わり，「糜粥」と名付く）《全体須知》（1894，第3章，胃汁）

ただし，蘭学資料の用例が宣教師資料のそれより時期が早いからといって，「食物消化」が蘭学資料から宣教師資料へ伝わったと考えるのは不適切で，漢籍には次のような用例が存在するので，蘭学資料と宣教師資料に見える「食物消化」は，みな漢籍に遡ってその語源を求めるべきだと思われる。

- ・自六月二十五日以来，始覺食物消化，其熱亦止。今胸中甚覺清爽。（六月二十五日から，やっと食物が消化されたように感じて，また熱も止まった。今，胸の中はとてもすっきりしている）《聖祖仁皇帝親征平定朔漠方略》（清・温達ら撰，1708，卷45）

その他の四字語については，前部二字語基と後部二字語基に分けて，語基のレベルで共通する語がどれだけあるかを調べてみることにした。その結果，前部二字語基の場合では，次の22語が日中双方の四字語にともに用いられていることがわかった。（蘭学資料（蘭）と宣教師資料（宣）の用例は互いに斜線／で区分した。語例後の数字は出自資料の年代を示す。）

地球	（蘭）地球重力 1798，地球回転 1850／（宣）地球軌道 1855，地球摂力 1896
風気	（蘭）風気痞滞 1850／（宣）風気圧力 1896
感動	（蘭）感動遅鈍 1857，感動過敏 1857／（宣）感動精神 1887
肌肉	（蘭）肌肉瘦削 1805／（宣）肌肉妙用 1894，肌肉収縮 1894，肌肉性情 1894
脊髓	（蘭）脊髓神経 1805／（宣）脊髓脳筋 1894
交感	（蘭）交感神経 1857／（宣）交感変化 1868
精液	（宣）精液総管 1853／（蘭）精液射出 1857
全身	（蘭）全身衰弱 1815／（宣）全身骨数 1894
人工	（蘭）人工氷点 1850，人工磁石 1850／（宣）人工物料 1868
太陽	（蘭）太陽引力 1798／（宣）太陽火力 1876
天地	（蘭）天地関渉 1852／（宣）天地万物 1876
天然	（蘭）天然磁石 1850／（宣）天然津液 1876
万物	（蘭）万物化成 1836，万物成形 1850／（宣）万物生化 1876
形体	（蘭）形体運営 1852／（宣）形体気象 1896，形体式様 1896
血脈	（宣）血脈総管 1853／（蘭）血脈過敏 1857
循環	（蘭）循環往来 1805／（宣）循環流通 1894
飲食	（蘭）飲食汎溢 1805，飲食消化 1805／（宣）飲食男女 1876，飲食失調 1876
運行	（蘭）運行増盛 1805／（宣）運行筋脈 1887
知覚	（蘭）知覚活動 1805，知覚敏捷 1857／（宣）知覚運動 1894
子宮	（蘭）子宮分娩 1805／（宣）子宮収縮 1858
自行	（蘭）自行舟車 1850／（宣）自行軌道 1855

自然 (蘭) 自然氷点 1850, 自然良能 1857／(宣) 自然生成 1887

各用例の出自資料の年代を見ると、蘭学資料で先に用いられたものがほとんどである。ただし、この22語は、例外なく古い漢籍に出典を持つものなので、前述した「食物消化」のように、蘭学資料の用語が宣教師資料に影響を与えたというよりも、漢籍からの既存語がそれぞれ蘭学資料と宣教師資料の両方に取り入れられたと考えるのが適切であろう。また、日中共通のこの22語は、蘭学資料の前部二字語基の331語(異なり語数)の6.6%、宣教師資料の前部二字語基の253語(異なり語数)の8.7%に相当するに過ぎない。このことから、前部二字語基における日中間の用語の共通度がかなり低いことがよくわかる。

一方、日中共通に見られる後部二字語基は以下に示した10語である。これは、蘭学資料の後部二字語基の369語(異なり語数)の2.7%と、宣教師資料の後部二字語基の240語(異なり語数)の4.2%に相当するので、前部二字語基と同様に、後部二字語基においても日中共通に見られる用語の比率がかなり低いことが明らかである。

動物 (蘭) 草食動物 1850, 乳養動物 1850, 冷血動物 1857／(宣) 乳哺動物 1853
 発動 (蘭) 生機発動 1805, 体機発動 1857／(宣) 機関発動 1868
 過度 (蘭) 飽和過度 1852, 栄養過度 1857, 瀉血過度 1857／(宣) 安逸過度 1858
 過多 (蘭) 粘液過多 1805, 脂肪過多 1805, 眼目過多 1815／(宣) 飲酒過多 1858
 機関 (蘭) 神経機関 1857, 生殖機関 1857／(宣) 火輪機関 1868
 世界 (蘭) 第二世界 1836, 第一世界 1836／(宣) 極楽世界 1857
 血脈 (蘭) 神経血脈 1850／(宣) 培養血脈 1894
 圧力 (蘭) 大気圧力 1852／(宣) 天気圧力 1868, 空気圧力 1876, 流質圧力 1890
 運動 (蘭) 左旋運動 1789, 屈伸運動 1805／(宣) 機関運動 1860, 知覚運動 1894
 舟車 (蘭) 自行舟車 1850／(宣) 火輪舟車 1855

上掲の諸語は、「圧力」を除いて、いずれも漢籍に出典を持つ語である。つまり、これらの後部二字語基は、日中双方の資料で共通に見られるとはいえ、互いに影響関係にあるというよりも、蘭学資料と宣教師資料がともに古い漢籍にある既存語から影響を受けたと考えるのが自然であろう。「圧力」については、先に6.3で、日中両国で別々に造られ、語形が偶然に一致したものとしたが、語源を突き止める余地がまだあるように思われる。

この節で、四字語の範囲で日中双方の用語の共通度が低いという結果を得たが、蘭学資料と宣教師資料の用語全体に及ぶ結論を出すには、なお、二字語や三字語の調査結果と合わせて検討する必要がある。

8. 3 + 1 型の四字語

宣教師資料では、2 + 2 型の四字語に次いで二番目に多いのは、38語で抽出語の10.7%を占める3 + 1 型四字語である(表2参照)。これに対し、蘭学資料にある3 + 1 型四字漢語は、計40語あつ

て抽出語の 7.1% を占めている。語数の面であり差がないが、日中双方の語例を比較しながら、このパターンの様相を記述しておきたい。

3+1 型四字語は、2+1 型三字語と類似する語構成を持っている。まず、後部一字語基の役割に注目したい。宣教師資料の 3+1 型では、造語数 2 語以上の後部一字語基が 7 語基見られ、これによって構成された四字語が計 25 語で、3+1 型の 65.8% を占める。一方、造語数 1 語だけの後部一字語基で構成された四字語は 13 語あって、同 34.2% を占めている。この結果からは、3+1 型四字語の形成において、造語数の多い後部一字語基が重要な役割を果たしている様子がうかがえる。主な後部一字語基とその語例を示すと、次のようになる。

- 式 (6 語) 玻璃体+式, 横截面+式, 脊骨節+式, 聯質網+式, 写字機+式, 指字機+式
 法 (5 語) 弧三角+法, 取淡気+法, 試摩電+法, 蒸養気+法, 製吸鉄+法
 器 (5 語) 発化電+器, 化発電+器, 摩発電+器, 蓄電気+器, 増聚電+器
 局 (3 語) 電報信+局, 電気機+局, 新聞紙+局
 党 (2 語) 三合会+党, 天地会+党
 口 (2 語) 肺脈管+口, 心回管+口
 語 (2 語) 日耳曼+語, 意大里+語
 性 (1 語) 全吸鉄+性

上掲の後部一字語基は、そのほとんどが 2+1 型三字語の後部一字語基も兼ねており、現代中国語に受け継がれている。19 世紀後半という時期に、このような 2+1 型や 3+1 型を構成する後部一字語基がすでに中国語に存在し、しかも、三字語・四字語を派生的に構成する兆しが見え始めていたことは、近代以後の中国語の語構成を考える際に重要な意味を持っている。

また、前部三字語基の構造は 3+1 型四字語の形成に直接関わるので、調べてみる必要がある。前部三字語基を大きく 2+1 型と 1+2 型に二分し、それぞれの中で結合関係を振り分けていくと、表 13 のような 9 通りのパターンにまとめられる。

表 13 宣教師資料の 3+1 型四字語における前部三字語基の語構成

	結合関係	語例 (／線は語構成の下位区分を示す)
2+1 型	①N+N 連体修飾関係	玻璃+体, 脊骨+節, 電気+機, 腦気+筋, 日月+食, 三合+会, 天地+会, 新聞+紙
	②V+N 連体修飾関係	写字+機, 指字+機, 聯質+網
	③V+N 述客関係	発化+電, 化発+電, 摩発+電, 増聚+電, 出進+口
	④A+N 連体修飾関係	傷老+兵
1+2 型	⑤N+N 連体修飾関係	電+報信, 肺+脈管, 弧+三角, 火+輪車, 火+輪船, 上+牙床／心+回管
	⑥V+N 述客関係	取+淡気, 蒸+養気, 蓄+電気, 打+綿花, 売+飯食／試+摩電, 製+吸鉄
	⑦A+N 連体修飾関係	横+截面
	⑧M+V 連用修飾関係	全+吸鉄, 双+交接
	⑨3 字の音訳語	日耳曼, 意大里

このうち、2+1型の②では、「字を写す、字を指す」のようなV+N述客関係を持つ前部二字語基が後部一字語基「機、網」を修飾することで、2+1型V+N連体修飾関係を構成している。③では、中国語式のV+O統語構造を踏まえて、「発化する、摩発する、増聚する」のようなV+V連用修飾関係を持つ動詞性前部二字語基が述語をつとめ、目的語の名詞性後部一字語基「電(気)」を支配する形で、2+1型V+N述客関係を成している。

また、1+2型の⑤では、N+N構造の後部二字語基が多数を占めているが、／線で区切った「心+回管」の「回管」だけが「(血が)回る管」のようなV+N連体修飾関係を持つ後部二字語基となっている。⑥は、同じくV+O統語構造でありながら、「取(る)、蒸(す)、蓄(える)」などの動詞性前部一字語基が述語をつとめ、「淡気、養気、電気」などの名詞性後部二字語基が目的語を担うようになっている。ただし、／線で区分した「試+摩電、製+吸鉄」の2語では、目的語にあたるのは「電を摩る、鉄を吸う」のようなV+N述客関係を持つ二字動詞なので、特別な語構成となっている。⑧は、副詞性前部一字語基(M)の「全」「双」が後に続く動詞性後部二字語基(V)の「吸鉄(鉄を吸う)」と「交接(する)」を修飾する形となっているので、M+V連用修飾関係の語構成と考えられる¹⁵。

これに対して、蘭学資料の3+1型四字漢語では、造語数2語以上の後部一字語基が4語基見られ、これによって構成された四字漢語が計31語で、3+1型の77.5%を占めている。一方、造語数1語だけの後部一字語基が9語見られ、同22.5%を占めるようになっている。ただし、造語数の多い後部一字語基では、「一症」で造られた25の四字漢語がいずれも『眼科新書』(1815)という1資料に集中しており、分布上のアンバランスが目立っている。

症 (25 語)	癌瘡様+症, 包涙腫+症, 包膜腫+症, 不貫徹+症, 掣抽病+症, 癩老人+症, 隔皮傷+症, 固結様+症, 固結腫+症, 厚布状+症, 壞血病+症, 痂屑様+症, 疥癬様+症, 酷厲液+症, 全附着+症, 全生著+症, 神経様+症, 生肉粒+症, 水綿様+症, 鵝瘤毒+症, 頑癬様+症, 無疼痛+症, 細釘状+症, 粘液様+症, 諸虫咬+症
体 (2 語)	不透明+体, 無機性+体
性 (2 語)	華爾斯+性, 無量機+性
中 (2 語)	乾燥気+中, 硝子管+中
系 (1 語)	補充機+系

また、宣教師資料の場合に倣い、蘭学資料の前部三字語基を結合関係の違いによって振り分けると、表14のような結果を得た。表中の①-⑨の番号は、前掲の表13と対応しているが、その中で、④'⑧'⑨'の3パターンは宣教師資料になく、蘭学資料のみに見られるものである。

¹⁵ 記号MはModifier(前位修飾語)の略称であるが、野村雅昭(1988)では「副言類語基」の記号として、野村雅昭(1998)では「副用類」の記号としてMを用いたことから、修飾語の中でも、連用修飾語または副詞性の修飾語に限ってという意図が推察される。本稿では、野村氏の用法にしたがう。

表 14 蘭学資料の 3+1 型四字漢語における前部三字語基の語構成

	結合関係	語例（／線は語構成の下位区分を示す）
2+1 型	① N+N 連体修飾関係	癌瘡+様, 痂屑+様, 疥癬+様, 神経+様, 水綿+様, 鷓鴣+毒, 硝子+管, 地脂+状, 乳汁+様, 十二+指/厚布+状, 細釘+状, 頑癬+様/粘液+様, 壞血+病/酷厲+液, 厄日+度
	② V+N 連体修飾関係	包涙+腫, 包膜+腫, 隔皮+傷/掣抽+病, 乾燥+気, 補充+機/固結+腫, 固結+様
	③ V+N 述客関係	なし
	④ A+N 連体修飾関係	無機+性, 有機+体, 無量+機
	④' N+V 主述関係	諸虫+咬
1+2 型	⑤ N+N 連体修飾関係	なし
	⑥ V+N 述客関係	癸+老人, 生+肉粒
	⑦ A+N 連体修飾関係	なし
	⑧ M+V 連用修飾関係	全+附着, 全+生著, 不+貫徹, 不+輸送
	⑧' M+A 連用修飾関係	不+透明, 無+疼痛, 不+等刃
	⑨' N+V 主述関係	腦+焮衝
	⑨ 3 字の音訳語	華爾斯

このように、宣教師資料の場合とは大まかな対応が見られるものの、語の分布や結合関係の細部に至っては多くの不一致が存在している。たとえば、2+1 型の①では、宣教師資料に比べて語数が多いだけでなく、前部二字語基には「癌瘡, 神経」のような N+N 構造の名詞もあれば、／線で区分した「厚い布, 細い釘」のような A+N 構造や「粘る液, 壊れた血」のような V+N 構造の名詞も見られる。②の場合も宣教師資料より語数が多く、前部二字語基には「涙を包む, 皮を隔てる」のような V+N 述客関係を持つ動詞があるほか、／線で区切って示したように、宣教師資料には見られない「掣抽する, 乾燥する」のような V+V 並列関係や「固く結ぶ」のような A+V 連用修飾関係を持つ動詞も現れている。ちなみに、①と②の後部一字語基を見ると、『眼科新書』の独自用法ともいえるべき「一様, 一状, 一腫」などが多用されているところも特色になる。また、③は、宣教師資料にあって蘭学資料に見られないパターンである。④は、双方の資料にあるとはいえ、蘭学資料の「無機+性, 有機+体」などと宣教師資料の「傷老+兵」では、前部二字語基の語構成に相違がある。

1+2 型の⑤は、宣教師資料では語数が比較的多いものの、蘭学資料では全然見当たらず、興味深い。⑥も同じく、宣教師資料では語数が多いのに対して、蘭学資料では造語力があまりないパターンである。⑧と⑧' の 2 パターンでは、蘭学資料側の語数が多いだけでなく、「不, 無」などの打消しの接頭辞が付いた用例が多く見られるところも宣教師資料と違う。また、⑨' は 2+1 型の④' とともに、宣教師資料になく、蘭学資料だけに見られるパターンに属するが、宣教師資料の 3+1 型四字語では、N+V 主述関係の前部三字語基が出現しにくいことを示している。

以上見てきたように、3+1 型三字語を調べてみると、宣教師資料にせよ蘭学資料にせよ、後部一字語基の機能はすでに確立されていたように見受けられる。ただし、前部三字語基の構造を具体的に見ていくと、宣教師資料と蘭学資料の間のずれが見えてくるだけでなく、中日両国の現

代語の語構成パターンとの相違も浮き彫りになる。中日両国の現代語の視点から見れば、3+1型三字語はまだ進化の途中にあるというべきであろう。

9. まとめ

本稿では、宣教師資料の四字語を対象に、語基の品詞性、結合関係、造語力および出自などを検討することによって、その全体像の解明に努めた。また、蘭学資料との対照を通して、日中双方の四字語に見られる特色や影響関係についても考えてみた。これまで述べてきたことをいくつかの要点にまとめておきたい。

(1) 今回の調査では、約117.5万字に及ぶ13種の宣教師資料から計355語の四字語を抽出した。しかし、先に行なった7種の蘭学資料に対する調査では、約101.8万字の本文から計561語の四字漢語を抽出することができたので、両者を比較すると、宣教師資料における四字語の出現率が蘭学資料に比べて相当低くなっていることがわかる。その理由として、用語の抽出は専門語を中心に行なったのであるが、宣教師資料では、二字語・三字語・四字語を含め、専門語そのものが全体的に少ない傾向にあるため、四字語でかつ専門語という条件を満たしたものが自ずと限られていることがあげられよう。

また、四字語の語数が少ないという中で、2+2型の四字語は294語見られ、抽出語の82.8%を占めている。これは、蘭学資料の2+2型四字漢語が514語に及び、抽出語の91.6%を占めているのに比べて、明らかに低い(表2)。このことから、古い漢籍に由来した四字熟語とは別に、近代以後から活躍し始めた2+2型が、むしろ、蘭学資料で一步先に確固たる地位を得ていたと推測される。これに対して、宣教師資料では、2+2型の語数が最も多かったとはいえ、3+1型と1+3型による造語も行なわれており、2+2型は蘭学資料に見られるような安定した地位に至っていないように見受けられる。

(2) 二字語基のレベルで宣教師資料と蘭学資料の品詞分布を比較してみると、とりわけ、名詞性語基(N)と動詞性語基(V)の相違が目される(表3)。前部二字語基では、蘭学資料の名詞性語基の比率(70.6%)が宣教師資料のそれ(53.4%)より高いのに対して、宣教師資料の動詞性語基の比率(39.1%)が蘭学資料のそれ(24.9%)を上回っている。一方、後部二字語基では、宣教師資料の名詞性語基の比率(68.4%)が蘭学資料のそれ(26.9%)より高く、宣教師資料の動詞性語基(25.5%)が蘭学資料のそれ(59.7%)に比べて低い。つまり、前部二字語基と後部二字語基では、正反対の品詞分布を見せている。

このような品詞分布の特徴は、直接2+2型四字語の結合関係(表4)に反映されている。たとえば、宣教師資料では、連体修飾関係の四字語(55.8%)が極端に多いが、これは、主として、後部二字語基に名詞性語基(68.4%)が多いという特徴に関連する。また、主述関係の四字語(7.8%)がかなり少ないのは、後部二字語基に動詞性語基(25.5%)が少ないという品詞分布の特徴に影響されていると思われる。これに対して、蘭学資料では、主述関係の四字漢語(42.2%)が最も多い背後には、主として、後部二字語基に動詞性語基(59.7%)や形容詞性語基(13.4%)が多いという品詞分布の特徴があるためであろう。

(3) 宣教師資料では、連体修飾関係の四字語が抽出語全体の 55.8% を占め、語数が最も多い語構成パターンとなっているが、詳しく見ていくと、N+N 連体修飾関係の語が 104 語 (35.4%) に達しており、二つの名詞性語基が結合してできた四字語が宣教師資料の中で最も多く使われていることがわかる。蘭学資料にある同類語が 17.1% にとどまるのを考え合わせると、N+N 連体修飾関係の四字語は、まさに、宣教師資料の四字語における代表的な造語パターンといえる。

(4) 宣教師資料では、主述関係の四字語がわずか 23 語で、四字語全体の 7.8% に過ぎないのに対して、蘭学資料では、主述関係の四字漢語が 217 語に達し、四字漢語全体の 42.2% も占めている。なぜ日中間にこれほどの開きができたのか。その理由として考えられるのは、蘭学資料の四字漢語における主述関係の認定方法である。

たとえば、「感覚過敏」と「精力乏弱」について、それぞれ「感覚が過敏である」「精力が乏弱である」と理解すれば、N+A 主述関係の四字漢語になる。しかし、後語基を名詞としてとらえると、語構成は「感覚の過敏」「精力の乏弱」のような形に変わり、N+N 連体修飾関係になる可能性もある。このような場合、筆者は語基の本来の品詞性にしがたが、N+A 主述関係の四字漢語として分類したため、主述関係の語数の増加にある程度の影響を与えたものと思われる。ちなみに、N+A 主述関係から N+N 連体修飾関係への移行は、後語基が形容詞から名詞へ自由に切り替えられるかどうかという問題があるほか、前語基と後語基の意味的關係によって制約を受ける場合もあるので、認定方法以外の要因と合わせて検討すべきである。

(5) 二字語基の造語力を調べてみると、前部二字語基と後部二字語基で、1 語基あたりの平均造語数がそれぞれ 1.16 語 (表 5) と 1.23 語 (表 6) の低い数値にとどまり、造語数の多い語基がかなり少ないことがうかがえる。一方、蘭学資料の場合では、1 語基あたりの平均造語数がそれぞれ 1.55 語と 1.39 語となっているので、宣教師資料のそれを少し上回っている。

このように、現代中国語の立場に立って、宣教師資料の四字語をながめると、いまだに語基の造語力が弱く、結合の臨時性が強い段階にあるように感じられ、重要概念を担う二字語基が中心となって、一連の 2+2 型四字語が派生的に創出されるような現代四字語との隔たりが相当大きいといわざるを得ない。一方、蘭学資料の四字漢語は、宣教師資料の四字語に比べ、語基の造語力などの点で一歩進んだものの、こちらも現代日本語の四字漢語の語構成的特徴が十分に備わっていない状況にある。

(6) 「2 字出典なし」の二字語基では、日中同形語の語源問題が注目に値する。たとえば、「鉄道、圧力、流質、吸力」などの場合 (表 12)、蘭学資料の用例が宣教師資料の用例より先に出ているものの、双方用例の時間差がわずかで、しかも 19 世紀後半の宣教師資料が蘭学資料の用語から影響されたような形跡がほとんどないことを考えれば、現時点の数例だけでは、どれが日本製のものか、どれが中国製のものか、あるいは、どれが日中で別々に造られたものかを判断するのにまだ根拠が足りないように思われる。この課題は、四字語で論じるよりも二字語の語源調査を徹底させることで解明していくべきである。

参考文献

- 野村雅昭 (1988) 「二字漢語の構造」『日本語学』5: 44-55. 東京：明治書院
- 野村雅昭 (1998) 「現代漢語の品詞性」『東京大学国語研究室創設百周年記念 国語研究論集』128-144. 東京：汲古書院
- 佐藤亨 (2007) 『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』東京：明治書院.
- 朱京偉 (2011a) 「蘭学資料の三字漢語についての考察—明治期の三字漢語とのつながりを求めて—」『国語研プロジェクトレビュー』4: 1-25. 東京：国立国語研究所. (冊子体の第1巻 117-141 に収録).
- 朱京偉 (2011b) 「在華宣教師の洋学資料に見える三字語—蘭学資料との対照を兼ねて—」『国立国語研究所論集』1: 93-112.
- 朱京偉 (2011c) 「蘭学資料の四字漢語についての考察—語構成パターンと語基の性質を中心に—」『国立国語研究所論集』2: 165-184.

Four-Chinese-character Words in Missionaries' Documents in China: A Comparison with the Written Documents of Dutch Studies in Japan

ZHU Jingwei

Beijing Foreign Studies University /

Invited Professor, Department of Linguistic Theory and Structure, NINJAL [-2010.10]

Abstract

The author has previously carried out a comprehensive analysis of three-Chinese-character words in documents written by Dutch Studies scholars in Japan (Zhu Jingwei, 2011a). In another paper (Zhu Jingwei, 2011b), the author expanded his research to three-Chinese-character words in missionaries' documents and compared Chinese and Japanese three-Chinese-character words from a lexicological perspective. In a third paper (Zhu Jingwei, 2011c), the author focused on four-Chinese-character words. The present paper continues this line of research by investigating the four-Chinese-character words used in missionaries' documents and comparing those found in Dutch Studies documents.

The author found that, in terms of word formation patterns, there is no significant difference between the two types of documents, but the numbers of Chinese and Japanese four-character words involving the same word formation pattern differ greatly. The research shows no direct 'word-borrowing' relationship in four-Chinese-character words between the missionary documents and the Dutch Studies documents. The borrowing of four-Chinese-character words must have started only in the Meiji period.

Key words: four-Chinese-character word, missionaries' documents in China, morpheme, word formation pattern